

腰椎変性すべり症に対する腰椎椎管拡大術の術後成績

山口大学大学院医学系研究科 整形外科

磯部 淳一・田口 敏彦・加藤 圭彦・片岡 秀雄

Results of Enlargement of the Lumbar Vertebral Canal in Lumbar Degenerative Spondylolisthesis

by

Junichi ISOBE, Toshihiko TAGUCHI, Yoshihiko KATO, Hideo KATAOKA

Department of Orthopedic Surgery

Yamaguchi University Graduate School of Medicine

Ube, Japan

Key word : Lumbar Degenerative Spondylolisthesis (腰椎変性すべり症),
Enlargement of the Lumbar Spinal Canal (腰椎椎管拡大術)

はじめに

今回、腰椎変性すべり症に対して当科にて行ってきた腰椎椎管拡大術の術後評価を目的として、臨床成績及びX線学的検討を加えたので報告する。

対 象

対象は平成3~11年の間に腰椎変性すべり症に対して腰椎椎管拡大術を施行した67例である。男性30例、女性37例で、手術時平均年齢65.5歳(43~85歳)、平均術後経過期間8年であった。

手術椎弓は1椎弓がL3:10例、L4:50例、計60例、2椎弓がL2-L3:3例、L3-L4:4例、計7例であった。

方 法

臨床成績は術前および調査時のJOA scoreと平林法による改善率で評価した。

改善率50%以上のものを成績良好群、50%未満のものを成績不良群とした。

X線学的評価項目は、術前、調査時の罹患椎間、隣接上下椎間の椎間板高、椎間可動域、Meyerding分類、すべり実測値、%slipとした。罹患椎間の椎間可動域、すべり実測値、%slipについては成績良好群、成績不良群の比較を行った。

結 果

JOA scoreは術前14.2点から21.8点に改善し、調査時の改善率は51.4%であった。成績良好群は48例、不良群は19例であった。

自覚症状は腰痛においては術前とほぼ同程度まで悪化傾向にあったのに対し、脊柱管狭窄による症状である下肢痛、しびれ、歩行能力は改善され、維持されていた。

椎間板高は術前に比べ、すべり椎間、上位椎間、下位椎間とも低下し、すべり椎間にその傾向が強かった(図1-a)。

椎間可動域はすべり椎間で減少していた。上下椎間での椎間可動域の増加は認めなかった。(図1-b)。

すべり実測値と%slipは、調査時やや増大する傾向を認めた(図1-c)。

Meyerdingの分類では、術前は67例全例Grade Iであったが、調査時6例がGrade IIであった。椎間可動域 $\geq 15^\circ$ 、前後屈すべり差 ≥ 3 mmがあるものを不安定性があるとすると、11例に術前不安定性を認めたが、調査時3例にのみ残存していた。

成績良好群と不良群との比較では、椎間可動

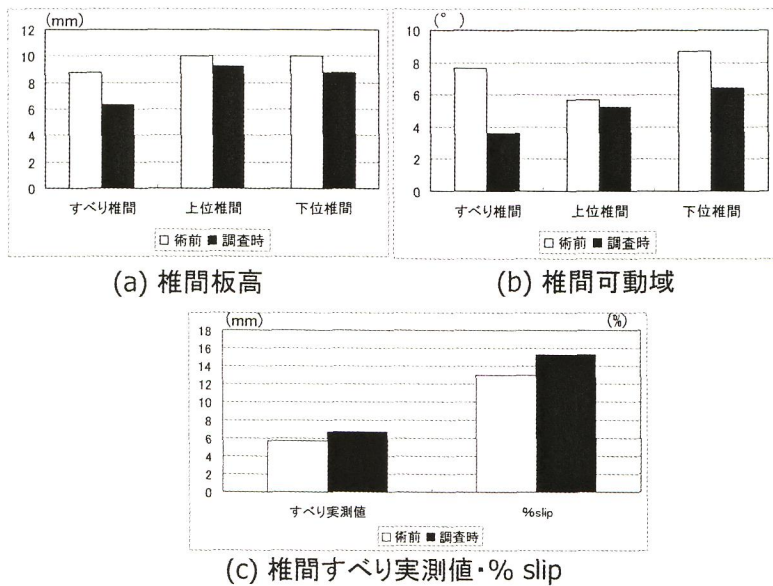


図 1

域は両群とも減少していた(図2-a)。すべりの実測値と%slipは成績不良群でやや高値であり、調査時両群とも増大していたが、成績不良群の方がより増大する傾向を認めた(図2-b, c)。

症 例

症例 手術時年齢51歳，女性，罹病期間は4年，主訴は約500mの間欠性跛行である。術前 JOA score は16点であった(図3)。

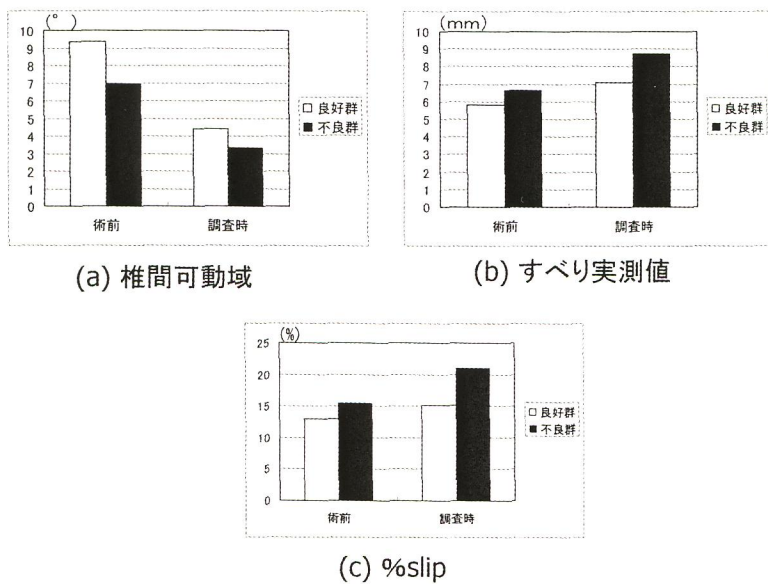


図 2

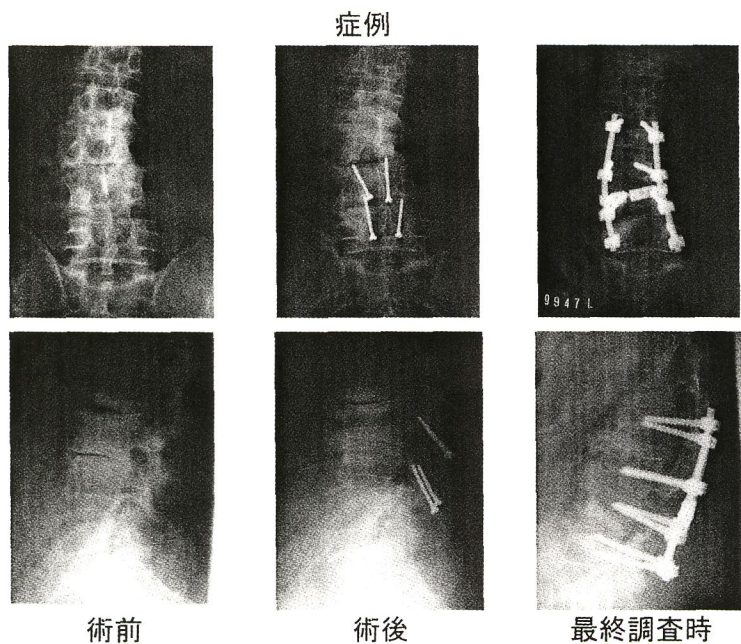


図3

術前 Xp では Cobb 角 25° の変性側弯を認め、%slip 7%、%slip の前後屈での差は0、椎間可動域は 5° であった。

L3, L4の腰椎椎管拡大術を施行し、術後は症状軽減し、JOA score は22点であった。術後7年経過し、腰痛、両下肢痛が徐々に増悪し、JOA score は11点となり、術後8年でインストゥルメントを用いた後側方固定術を施行した。調査時 JOA score は23点であり、自覚症状も軽減した。

考 察

当科では1976年より腰部脊柱管狭窄症に対し、一貫として腰椎椎管拡大術を施行してきた。小田らは腰椎変性すべり症81例に対して施行した腰椎椎管拡大術について、優56例、良20例、可5例、改善率79.3%と良好な成績を報告し、拡大した骨性の脊柱管は長期的にも維持され、再狭窄をきたした症例はないとしている。^{1),2)}

しかし、今回の調査では高度すべり例、変性側弯を伴う例、多椎間手術例に不良成績が多い傾向にあった。術後%slip 進行例と成績不良例との相関はある。³⁾とする報告がある今回の検討で

は、成績不良群の方がすべり実測値と%slip が、術前調査時ともに大きい傾向を認めたが、有意差は認めなかった。今後更に成績不良因子の詳細は検討が必要であると思われた。

結 語

腰椎変性すべり症に対する腰椎椎管拡大術の術後成績について検討した。術後平均8年で、成績良好群は71.6%、改善率51.4%であった。検討項目において成績良好群と不良群間に有意差を認めることは出来なかった。更なる術後成績の改善には、成績不良因子の検討が必要と考えた。

参考文献

- 1) 小田裕胤, 木村光浩, 藤本英明, 他. 腰椎変性すべり症に対する腰椎椎管拡大術の適応と手技. MB Orthop. 2004 ; 17(5) : 104-111.
- 2) 小田裕胤. 腰椎椎管拡大術. 越智隆弘, 菊池臣一. 編. NEW MOOK 整形外科 No.9 腰部脊柱管狭窄症. 東京. 金原出版 ; 2001. P196-204.
- 3) 加藤圭彦, 田口敏彦, 金子和生, 他. 腰椎変性すべり症に対する腰椎椎管拡大術の術後成績. 中部整災誌. 2006 ; 49(1) : 33-34.